



# 針葉樹會報

## 三峠の岩登り（クマ）

近ちやんは足の關節が痛むといふし、（之は中氣でも親の因果で

も將又自業自得のものでもないと辨明之務めて居たが眞疑の程はわからぬ）ベン公は例によつて出張の歸りに遠く飯豊へ高飛びして了ふし、之ぢや新入生諸君の三峠行きにO.B.が一人も行かない事になつて了ふので實は萬障繩合せて出かけたといふ譯。案の條集つた顔振れを見ると大部分は霜ふり姿の天下の秀才許りであつた。圖々しいのは望月、柿原、小林邊りでそれに輪をかけたのが斯くいふクマ公たつた一人。でも近頃の針葉樹會員は熱がないとか老ぼれたなんて、現役諸君に影口をたゝかれるであらう事だけは爰にクマさん獨り踏張つて辛くも防ぎ得たのだから、在京O.B.の人々々からコーヒーの一杯位はおごつて貰ふ権利はあるといふものだ。

總勢十二人、大月までぢや寝るひまがないと許りにギヤアく  
騒ぎ乍ライワナミヤマメの異ひ方など議論してゐたが、どうも少

し聲が大き過ぎた嫌ひがないでもない。以後汽車に乗つたら、大月で下りる人許りではないといふ事を頭に入れて置いて欲しいものだ。

午前二時四十九分大月發の電車に乗り換へる。素晴しく立派な電車になつたものだ。その昔「一日二日の山の旅」が洛陽の紙價を高からしめた頃に乗客一同で脱線した電車（？）を擔いでレールにはめ込んだ事は全く夢の様な想ひ出となつて了つた。

二時半、懷しの小沼驛に下りる。此處も昔はレールの傍に縁臺が置いてあつた小驛であつたが、今ぢや驛長も出札掛も居る相當な驛になつてゐる。

四時三十五分、ダルマ石の小屋に着く、お宮の傍を通る頃は真暗で雨さへ降つてゐたが、どうやら天氣豫報が珍らしく當つて小屋で飯をたべてる頃には全く明けて清々しい朝霧が谷から消えては現れ、駒鳥が忙し相に若葉の陰をさへすつて居た。此處に小屋が出來たのも私を感心させた事の一つだつた。

八十八大師までの急な登りの長かつた事、霽れて居れば富士が疲れを慰めて呉れるものを、雨が降らぬだけがもつけの幸ひ、梅雨時に山へ來て展望の利かぬのを嘲つのは贅澤といふものだ。

三峠へは三度許り行つたが、岩から登るのは今度が初めてだ。冬になるご美しい氷の瀧の様になる「不動の瀧」の手前の尾根の鼻から登るのが一番普通のものになつてゐるらしい。望月が勇敢にザイルをつけて真先に攀じて行つた。十米突許り上に棚の様な場所があつて、人々でアンザイレンして登つて行く、何しろ十

二人が一人々々やつて行くのだから、殿りをつとめた私は終いには寒くなつて了つた。一度拳大の石が真上から弾丸の様に落ちて來て、帽子のツバをサッと拂つて行つた時には流石にヒヤツとした。あれが頭の中心にでも落ちやうものなら相當な痛手だらう。いくら岩が硬いと云つても充分注意しなければならないと思ふ。

第一の棚から石段のそれ的な所を登つて今度はチムニー狀の所を登る。望月が上に居て引張つて呉れるんだが中々思ふ様にチムニーの中へ這入らない。コンちゃんのケツでは全く駄目だらう。

之が無事に済むとチムニーの頭を渡つて今度は膨れた岩を這ひ登る。之も柿原が上に居てジツヘルして呉れてゐるから後から行くものは大安心だ。それでも靴の人は足場を探すのにガリ／＼やつてゐたが、私は和製スカルペティをはいてゐたので滑りつこなしに無事難關突破、之で恐ろしい所は無くなつて了つて、後は三角點の手前見晴し臺まで呑氣な岩登りだ。皆がリュックサックを引上げてゐる間に、私は見晴臺の岩の上に仰向けになつて一睡りする。

三角點の標石を通つて下りにかかる。右手の縁臺に女學生が三人、何かインチキな歌を唄つてゐた。こいつ等は電車と一緒に小沼で下りた奴だが實際チヤツカリしたものだ。あんなのを嫁さんにも貰つたら岩棚か何かの積りでお尻にしかれる事疑ひなし。

岩場の下まで出ばつてゐた小屋の牛太郎の家とは別の、峯から下りて最初の小屋に荷物をおろす。十二時までもまだ二時間もある。露臺に横になる者あり、小屋に這入つて娘さんの手厚いサー

ヴィスをうくる者あり、山海の珍味をリュックから大事相に御披露に及ぶ者あり中々賑かであつたが、そろ／＼冷えを感じする様になつて、一時間たゞぬ内に何時の間にか一人残らず小屋の圍爐裡の周圍に集つて了つた。小屋の爺さんは自慢の蓄音器に「河内山宗俊」をかけて呉れる。朗らかな山登りだ。

歸りは府戸尾のも一つ先の尾根を下り、白糸の瀧を見物して上暮地までヒタ下りに下る。あゝなると下りも相當に疲れるものだ。

三十分許り前に小沼驛に着き、三時一分の電車で大月へ、三時四十七分發の上りに乗つて新宿へ着いたのは丁度五時五十分。

三峰の岩登りといふのは話には聞いて居たが、實際やつて見たのは初めてだつた。練習場としては相當面白い所だ。藤木氏の言ひ草ぢやないが「垂直の散歩者」なんていふ新聞の見出し見たいな言葉も浮いて来る。あれで富士さんでも見乍ら、所々にある棚に腰かけて煙草でも吹かせたら一層愉快だつたかも知れない。

望月、柿原、小林なんていふ連中の元氣で勇敢な姿を見て、北岳のバットレスに向つた小谷部などの事を思ひ乍ら、俺達の山岳部にも一騎當千の豪傑共が澤山居るなど、實際感心もし嬉しくも思つた次第、遠く異郷(?)の空に居る先輩達にも喜んで貰ひ度いものです。

(一〇・六・二十四)

宗作の死

望月達夫

十日、いやそれ以上も前のことになる。何時もの様に學生課の

前の郵便物の受入函から、僕が山岳部宛の二、三のものを取り出して、初夏のまぶしい光線の反射に顔を背けながら、その一つを見る。中村知一と云ふ人より送られたパンフレット様のものであつた。別に大した興味も持たず開けてみると、表紙に「佐伯宗作遭難の眞相」と云ふ黒枠に入つた文字の印刷されてある三十頁にみたぬ小冊子が出て來たのである。宗作遭難と云ふ字が先づ胸をついた。黒枠に入つて居るところから、既に宗作は此の世の人ではないことが次にぐつこ來た。夢中でその小冊子を讀んだ譯である。

宗作も遂に山に逝つて了つた。僕は彼に一度も逢つたことは無く、況んや彼と一緒に山を歩いた事もなかつた。その僕がこんな拙文を綴るのは僭越この上もない氣がするのだが——。けれど不思議にも死んだ彼の周囲の人達はよく知つて居る。彼の年老いた母親も知つてゐるし、彼の兄貴の榮作も知つてゐる。

前記の中村氏(その小冊子中で知つたのだが慶應山岳部の先輩)の綴るところを一寸要約してみれば次の様なことになる。

中村氏等は四月末以來、宗作と共に別山乘越小舎に這入つて居たが、丁度五月四日其處を出發して歸路についた。そして同日午前八時過地獄谷を通過し、剝那、金澤醫大の連中と同行して居た豊太郎が、スキーを着したまゝ音もなく雪の中に落ちこんださ云ふ。餘りに突發的なので唯普通の穴に落ちた位に宗作等は考へて居た。その中豊太郎が苦痛を訴へはじめ、油汗がタラタラとその頬をつたつて居た。これを見た宗作は止めるのも聞か

ず、リュツクとビンディングを脱し、その穴に飛び下りて豊太郎を抱きかゝへ、これを助けるとしたが、彼の顔面も又灰色を變じ中村氏等が亞硫酸瓦斯の穴と直感し、瓦斯の放出に専念し、二人を助けるとしたが、其の中二人共穴の底に倒れた。この間約五秒内外の事であつたと云ふ。

豊太郎は墜落より二分——二分半内外に穴より救ひ出され、折よく居合せた金澤醫大の連中が彼にビタカンファーを注射したそこ。豊太郎はそれで生命を取止め得た。それから中村氏が危険を冒して穴に入り、宗作を救ひ出したのは、最初豊太郎の落ちてより四分——五分迄の時間であつた。引上げた時は宗作は既に息たへ、ビタカンファー都合三本を注射し、そして人口呼吸を繼續したけれど既に事きれてゐたと云ふ。絶望を知りつゝも人口呼吸を十一時半迄續け、更にジキタミン一本を注射し、尙心臓按摩法を試みたと云ふが、總ては無効に歸し午前八時廿分頃屍と化した宗作は、そのまま不歸の客となつた。

以上が大體中村氏の傳ふる處の宗作の死の概要であつて、右によつても判る様に宗作の死は全く運命的なものであつた。この小冊子を部室で讀んだ小谷部や小林や林達で「俺達と一緒にしたらとてもビタなんとか云ふ様な注射は思ひもよらないね——」等と話し合つたが、山での位行きなどいた手當がし得たのは全く偶然だと云へば云へる。而も死んだ場所が自分達の山であることは彦さんの時と同じ様な氣さえしてくる。山が山である以上矢張りやられる時はやられてはふ。そしてやられる時も前から定まつて

るると云ふ様な、運命的な結論さえ導き出せ相な氣がしてならぬ。

宗作の突然の死に驚いて居る昨日今日、僕はゆくりなくも、古い「登高行」の頁を繰つて居たら青木勝氏の書いた「立山冬期登山」の記事の末に佐伯龜藏の死をいたむ文章が掲げてあるのに、折から心ひかれて讀むでいつた。

「芦嶺寺村には外の山村でめつたに見られない程、逞しい立派な山案内が揃つてゐる。その中でも龜藏はその第一人者と云はれるいゝ仲間を持つてゐた。それは榮作、宗作の兄弟と八郎とで、龜藏を加へて四人の相棒だつた。彼等四人はどんな山に行つてもいゝ仲間で、この四人さへ揃つてゐればどんな處へ行つても恐しいことは一つもない……云々。」

これは其の中の數行であるが、其の當時はまだ福松や兵次も生きて居たことであるし、芦嶺には立派な山案内が澤山居たのだ。龜藏は雪崩にやられたのであるが、その時龜藏と同行してゐた人達の中には宗作も居た。そして龜藏一人が不幸にもやられて了つたのだ。此度の宗作の遭難を聞くに及び其處に何か約束されてゐる様に感ぜられるのは僕一人だらうか――。

宗作の山にのこした足跡に就いては僕なごの筆をかりる迄もない。横さん等の立山遭難の當時の山案内の一人として、その名が「山行」に記されてゐる位だから、彼の山の生活も兵次と同様隨分若年の頃から始めた事と思ふ。

それにしても榮作、宗作、兵次と三人共立派な山案内の兄弟中

二人は既に俗界を遠く離れた、清く崇高き山靈に其の尊い生命を捧げてしまった。あの足の少し悪い榮作はどんなに二人の弟達のことを悲しんでゐることか。榮作と云へば昨夏の剣澤で逢つた時は、何んだか元氣がない様だつた。

又彼等の老いた母に逢つたのは随分前の事になる。始めて僕が剣澤に行つた時だから、たしか昭和六年の夏のことか。八月の聲を聞くと長次郎、平藏の兩雪渓も目に見える様に雪がへり、剣澤の上部は別山乗越に至る迄處々岩肌を見せる程だ。その夏剣澤を引上げたのはその時分、峰には初秋の風もたつかと思はれ、空の色もめつきり青さを増して來る頃であつた。昭和六年と云へばその前年の一月、剣澤の雪崩の遭難で六人の尊い人命が捧げられ、その記憶のまだ生きしい頃であつた譯だ。この六人の中の二人は福松、兵次の芦嶺きつての名案内であつたことは云ふ迄もない。丁度歸へり路別山乗越の小舎で道草を喰つて居た時、折から其處に來合はせて居た年老いた婦人を「死んだ兵次のお母さんだ」と佐伯義道が引會はせて呉れた。記念に老母を入れてとつた其の時の寫眞が今も僕のアルバムの一页を飾つて居る。その老母は未だ生きて居るのかしら。あの元氣相な、それでも大切な一子を雪崩の爲にとられた母、そして今又一人を失つてゆく母、中村氏の記す處に依れば、母親は未だ老ひの日を芦嶺寺に暮してゐるゝ聞く。あの幾百年もの昔から平和な静かな夢の如き山村、水車の音がギーゴトンとゆるい音をたて、常願寺川が立山の雪を解かして流るゝあの村、其處にもこうした悲劇の誕生が繰返へされるのを

胸痛く思ふ。

山に行く者は山で死ぬかもしけぬ運命を黙々の中に知つて居るのだ。それでも登らなければ居られない。が山案内者の場合はその業務が、たとへ全部でないとしても幾らかは糊口の術である以上、アマトウルの場合よりももつと深刻な悲しみがありはしないだらうか。

最後に僕は思ふ。北アルプスを舞臺として繰広げられた日本の登山も既に一つの歴史を型造つてゐる今日、その蔭になり日向になつて、貴い人柱となつた幾多の有名なる山案内の記録が纏められたらばと。

附記 「針葉樹」第五號の記録に依れば、昭和五年の四月に磯野さんが、亡くなつた中島さん等と宗作を連れて劔に行つて居られる。同氏の思ひ出話がうかゞへたらば興味多いこと、思ふ。

(一九三五・六・一八)

富士山文献解題(三) 増山清太郎

落合直文著「高嶺の雪」

(明治二十九年九月 明治書院發行)

野中氏の冬期登山並に滯嶽に就いて、當事者二人の記述を紹介したから、次に第三者の物したうちで、最も纏つた著書として「高嶺の雪」を擧げる。

菊版百三十六頁の小冊であるが、要領良く縫めて、前二著には

書いてない處の、野中氏夫妻の生立も簡単に述べてある。文章の或る部分が、「芙蓉日記」と全く同一なのは「高嶺の雪」に做つたのであらう。特に何處といふ取柄は無いけれども、氣品の高い、良い本だと思ふ。卷頭に夫妻の寫眞を載せてゐる。

當時の明治書院の廣告を見ると、本書には鐵幹與謝野寛の新體詩「野中千代子君」を附錄として載せてゐる事を記し、また「日本山岳文献ノート」に依れば、佐々木信綱の短歌も入つてゐるさうであるが、初版には見當らない。再版以下にあるのであらう。尙村岡良彌著「高嶺の由紀」は全く別物である。

以上の三著を比較すると、時日に二三の相違が見られる。その中で史學常識上最も妥當と思はれるものを、前々號に書いて置いた。

附記——本書は帝國圖書館に初版一部を所蔵する。私は勿論持つてゐない。與謝野寛の新體詩は、詩集を二三當つてみたがどうも見付からない。「明星」の發刊前の事で、ちよつと探す手蔓が無い。現に全集編輯中の由であるから、その中にお目に掛る事も出来るであらう。

## 山岳部報告

日誌(六月)

定期部員集會 六月十日(月) 於國立部室

(出席者) 本科四名、豫科七名、専門部二名

今夏々山計畫の下相談等をなす。

臨時總會 六月十七日(月) 於國立部室

(出席者) 本科六名、豫科十六名、專門部四名

改正規約を配布し説明をなす。新入部員中正式に部員となした者に部員章を交付す。故中島嘉一郎氏よりの寄贈書籍を中島文庫とし、その扉開きをなす。夏山の計畫をなす。

定期部員集會 六月二十四日(月) 於國立部室

(出席者) 本科三名、豫科四名

雨の爲何時になく淋しい集會。雜談にくらす。

山岳寫眞、登山用具展覽會 六月二十八、九兩日

於小平評議員室

夏山を前にひかえて一般學生への奉仕の爲に豫科山岳部主催にて展覽會を催す。本科の連中も時節柄多忙な爲充分な援助は出來ず、豫科の岩崎、原、榎本等の諸兄の犠牲的努力によつたものである。はじめての事故豫定通りには出來なかつたが山岳部の意圖するところは一般にみとめられ、それのみにても充分の效果はあつたと思ふ。

### 記 錄 (六 月)

三峯より雲取山 (一日—二日) 大塚

將監峠、雁坂峠、甲武西 (一日—三日) 柿原、岩崎

三ツ峠岩登 (11日) 小谷部、鷹野、新羅、松浦、谷ヶ崎

カクネ里より鹿島北槍 (六日—十日) 小谷部

大菩薩嶺 (未詳) 小柳

白馬岳 (十三日—十五日) 小林、塙本

吉利山 (十六日) 原、高原

北岳バットレス登攀 (十九日—二十四日) 小谷部、鷹野、森川

鹿島槍、五龍岳 (二十一日—二十四日) 林

三ツ峠岩登 (二十三日) 吉澤氏、柿原、望月、小林、鷺崎、榎本、佐々木、岩崎、大塚、齊藤、秦、内田

### 中 島 文 庫 目 錄

- |    |   |
|----|---|
| 1  | Geoffrey W. Young; On High Hills  |
| 2  | George D. Abraham, Swiss Mountain Climbs                                    |
| 3  | Arnold Lunn; Alpine Ski-ing   |
| 4  | Claude E. Benson; British Mountaineering                                    |
| 5  | E. H. Blakeneay (Selected by); Peaks, Passes and Glaciers (Everyman's Lib.) |
| 6  | Hans Morgen Jhr Berge   |
| 7  | 小島烏水 日本アルプス 第一卷   |
| 8  | " 第二卷   |
| 9  | " 第三卷   |
| 10 | " 第四卷   |

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
辻村伊助	横有恒	志賀重昂	大島亮吉	志村烏嶺	志賀重昂	加納一郎	藤木九三	三木高峯	愛場秋文	河野齡藏	船田三郎	船田三郎	河野齡藏	船田三郎								
山行	ハイランド	日本風景論	北海道のスキーと山岳	千山萬岳	日本風景論	北海道のスキーと山岳	雪・岩・アルプス	山岳征服	日本アルプス	高山研究	岩登	岩登	日本アルプス									
富田碎花	安倍能成	吉澤一郎	冠松次郎	板倉勝宣	平賀文男	田邊主計(譯)	各務良幸・麻生武治(編著)	田部重治	河野齡藏	船田三郎	船田三郎	船田三郎	船田三郎	船田三郎	船田三郎	船田三郎	船田三郎	船田三郎	船田三郎	船田三郎	船田三郎	船田三郎
登山記	山中雜記	黒部谿谷	日本南アルプスと甲斐の山旅	山のしづく	山と雪の日記	エヴェレスト登山記	山岳大觀	山と溪谷	屋上登攀者	銀嶺に輝く	高嶺に輝く	高嶺に輝く	高嶺に輝く	高嶺に輝く	高嶺に輝く	高嶺に輝く	高嶺に輝く	高嶺に輝く	高嶺に輝く	高嶺に輝く	高嶺に輝く	高嶺に輝く

56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
柳田國男	三宅樹村	朝枝利男	鹿子木員信	小島烏水	船田三郎																	
山の人生	山岳と人生	趣味の登山	アルペン行	山水無盡藏	氷と雪	岩登り術	山の科學															
小山博(編輯)	小島烏水	河田楨	小島烏水	小島烏水	河田楨	赤石登山案内	日本アルプス登山案内記															
鐵道省	小島烏水	河田楨																				
日本北アルプス登山案内																						

79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57
山懷	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊	山邊
第三號	第四輯	第三號	一九二九	一九二八	一九二七	わらぢ	リュツクサツク	第五號	第六號	(追悼號)	第七年	第五年	(十週年記念號)	第廿四年第一號	第廿三年第二號	第廿二年第一號	第二一年第二號	(黑部號)	(奧羽號第二)	(尾瀬號)	山岳	矢島祐利(譯) アルプスの氷河(第一部)
立教大學山岳部々報 第二號	創刊號	第一回	第二輯	第一號	第二號	上	以	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	山想	山岳

針葉樹會例會 六月十四日(金) 如水會館  
 (出席者) 中川、松木、吉澤、近藤、高橋、芋川、園山、吉澤(松)、增山、外學生十二名。  
 臨時針葉樹會 六月二十九日(土) 於元園軒  
 (出席者) 中川、松木、吉澤、村尾、近藤、磯野、吉澤(松)、増山、鈴木、堀岡、(學生) 林、柿原、鷹野、小谷部、小林、望月、杉浦、森脇、森川、原、岩崎、高原、毛塙、日江井、齋藤、内田、新羅

## 會員消息

安達泰三君 長岡市下中島町九二、布川氏方へ轉居  
 芋川稔一君 品川區上大崎長者丸二七三、廣地氏方へ轉居  
 勤務先 北越製紙株式會社